

私の教育行政学への関心

—— 大学での教育研究と教育運動を中心にして ——

三 上 和 夫

研究室紀要 第43号 別刷

東京大学大学院教育学研究科 基礎教育学研究室

2017年7月

私の教育行政学への関心

——大学での教育研究と教育運動を中心にして——

三 上 和 夫

江口：昨年の11月から、有志の院生と教員で、史哲を中心に、東大の教育学部の歴史を振り返ってみたいと思ひ研究会を続けてきました。その中で特に、戦後教育学をどう考えるかという議論に注目しました。ひとつ上の世代の方々が戦後教育学批判や近代教育学批判を進めてこられました、わたしたちの世代は、戦後教育学のイメージ自体がおぼろげで、よくわからなくなってきている。そうした中で自分たちの時代の研究を教育実践や教育現実との応答関係の中でどう作っていったらいいのかと考えたとき、大学闘争の時期の議論というのがいまも影響を与えているのではないのかという見通しのもとに、その時期に注目しながら研究会をおこなっています。前回の研究会で先生の論文を読ませていただきましたので、今回は当時のことを当事者の立場から振り返ってお聞かせいただければと思ひ、お願いをさせていただきます。

三上：書いてあることの相当部分がこちらにくる形になるかと思いますが、しばって、勝てそうなもので、発言してください。たぶん、自分でいけそうだというジャブをつかってみないでしょうか。

小玉：江口さんがまとめてくださったレジュメは、質問事項、論点をまとめてくださっているのですが、わたしたちの中でひとつ議論になったのは、かなりピンポイントなんですけれど、レジュメの3ページで、1968年の6月の医学部全共闘安田講堂封鎖、大学当局の機動隊導入、7月に全共闘がバリ封鎖路線をとりながら、7項目要求、それに対して4項目要求を出して、そのグループ間で政治的な争いが出てくる。三上先生は、4項目要求の側の正当性を主張しておられる。その点についてがひとつと、最近、大窪・川上が『素描1960年代』の中で、6月の機動隊導入に全共闘のみならず、民青系の学生も激しく反対していたが、川上によれば、共産党本部が方針転換を行い、行動隊を教育学部に常駐させて、11月

半ばに、党本部から方針転換の話がきて、勝利行動委員会が解散、民主化行動委員会が結成された。川上によれば、当時の共産党の宮本のヘゲモニーが出てきて、川上さんたちのもととの考えが退けられていった。三上先生たちの論文では、この時期の共産党の動きを、一定評価している。川上さんのストーリーの中では、川上らのグループと、共産党中央との軋轢があって、対立があった。三上先生から見て、そのあたりどうだったか、そこがポイントになっていまして。

三上：これは何分でまとめればいいですかね。シンプルにいえば、3分くらいでまとめて、その意義づけについては、3つくらいのグループに即して、分析的にまとめることもできるし、政策論としての良し悪しも含めて、一応の点数はつけられます。いかなる紛争も、座標系が一定固定せざるをえないという前提のもとで、これをやってもルール違反ではないという前提でやるべきだと思います。あらゆる政治組織、運動組織が、数週間で一定の意味をちゃんと宣伝する、あらゆる政策を、どうとんでも負けるというしょうもないグループもある、そういう事態がずっと続くわけですね。こういう場面における叙述方法を問題にすべきだと思います。わたしは、やっていることの97パーセントまでは合理的だと思っている。80パーセント以上は、多数派になりうるようにやってきた。双方ともにいろいろな意見や強調点があるが、2年から3年くらい、可能なら5年くらいの大学の中のあらゆるオピニオンをフォローできれば、誰にとっても、85パーセント以上は根拠ある文書資料によって述べられるものになっていくわけです。そもそもそういう文書を作らないとすれば、学生自治会としての資格がないわけで、メンバーシップがないわけであるから、これを議論する必要はないと思います。それから、いろんなグループをどのようにグルーピングし、一定の政治的意味づけがあるものとして理解しているかということが

重要かと思えます。わたしは、あまり知的に高度なものではないけれど、首尾一貫した価値観だけはもととしてるのが学生運動のグループであるからして、一定の合理性をもっている限りは、自治会で多数派になりうると考えています。

東京大学の紛争は、長年にわたる、いくつもの流れがあるということと、関わっている人間の政治的背景、現実的な、個別的利権の主張です。たとえばわたしが自治会委員長だった場合に、一番下でいいかということではなく、そもそも点数はとっている。言えることは、トータルに、大学紛争という政治過程の要素として、一定の意味をもち、勢力の変化の中での意味をもち、合理性をもって社会的に評価されるのであれば、多様な主張をも認めていることです。重要なことは、このようなグループが、赤門の中で、十数年間変にいろんなのがあったけど、8割まで含めて、まったくの非合理というようなことは言えない。卒業して同窓会なんかに来てくる人は、傷ももっているけれど、合理性・社会性ということについては、一定の社会意識・責任意識をもっている。中に立ち入ると、いろいろ問題もめますので、学生組織については、違った意見もちながら話すことになる。そのほか、話を聞く前に、たとえばわたしのオピニオンはどのへんなのか、正当性、価値観なんかについてご質問があったら、最初に言える部分は言っておきます、なにかありますか。

小玉：三上さんが闘争の中でとった立ち位置は、一応共有はしていると思います。全共闘と川上さんたち、民青系の関係で言うと、川上さんたちの側にいた、その上で、川上らの時代認識をどう思うか、ということになります。

三上：全国組織の首尾一貫した政策文書に依拠することが原則になると思います。いつでも多数派、いつでも正しい派です。その部分も含めて、ある程度維持せざるを得ない。その上で、自治会の委員長もやっていたが、全部嘘だったかということ、そうではない。いろんなことを言われても、主張を変えることはあまりなかった。そのほうが、首尾一貫した主張の通りやすさを確保することになります。学生運動にしても、やむを得ない多数併存を容認しないと、学生運動などではしない。学生である以上は、そういうもんだと思って付き合っているはずだと、ダメ押し的にこっちも言っておきたいということ

です。こういう考え方でいかんということはあるうが、その上で論争としては批判なさってください。

江口：三上先生のご入学からを、時系列にお伺いできればと思います。当時の状況もかなり違うと思いますので。ご入学は、1966年？67年でしょうか？

三上：65年です、大学院進学が70年だったと思います。75年に卒業したのかな、大学院の卒業は、就職があったという意味で、単位をとってたんじゃないかと言われそうですが。いろんな方がいらっしゃいますが、わたくしの場合は教育行政が首尾一貫した自分の専攻に近かったのものでそれでやってきた。結果的には、博士論文の審査のときに議論して、資料としての正当性と、議論のつながりということで、両方の考えを認める形で話を終えようということ、一応終わりました。

小玉：駒場のときサークルはやってた？

三上：サークルとしては、文科系のサークルもはいってはいたんですけど、陵禅会というのをまじめにやりました。座禅。これは、夏、秋、冬、春、2週間くらい道場に入ったり、まじめにやっていました。おもしろかったということです。半日くらいやっている落ち着くとか、いろいろあるということです。

江口：自治会活動などはかなり早くからやられていたのですか？

三上：自治会活動を本格的にはじめたのは、教育部の自治委員をやってからだと思います。それまでは、駒場の学生関係のもので、出入りはありましたが、本格的に、責任をもっているというわけではなかった。

小玉：本郷で教育学部に進学されたときのゼミというか、先生は？

三上：五十嵐先生が、教養の教育概論を含めてやっておられて、この人は一貫していたように見えたので、そのままゼミ帰属もそうさせていただいた。結果的には、あの先生が首尾一貫した見方をすることはある程度認められると思うが、そういうところに入っていたおかげで、わたくしのほうは、自治会のことと、政治的なもの見方をあまり大きく変化させなくてよかったという風に思っている。それで、大学院修了するころまでは、そういう政治的なものについてのいろんな資料は相当使っていたし、そのことについての先生方からの批判はありました。資料論の中で、特定の資料批判だとか含めて

やらざるをえないのは、やっぱり最終的に総論全部変えなきゃいけないというわけで、修士論文の最終審査で、そういう問題を聴いてくる教員がいて、こちらの姿勢としては、こういう格好で立論していたということで、両方の考え方を通したということです。

小玉：修論は？

三上：戦後改革期の資料、その資料は、教育刷新委員会とかなんですが、その時点では比較的まじめな、刷新委員会の審議録とか、議事録などの資料批判、これがまともだったんだと思います。その資料論について、かなり多くの点を批判したんですが、刷新委員会の資料論で批判をする、修論の資料論は、そういう話だった。

小玉：学部と大学院で、同期の友人は？教育行政で？

三上：教員になりました関君、浅野君などがいました。

小玉：われわれが聞き取りした、池田祥子先生は先輩？

三上：数歳上の先輩でした。

江口：池田先生は、65年に修士課程に入学。4つ上になるんですかね。

三上：佐藤一子さんは2歳上になるんだけど、頭の出来具合が違ってましたので、尊敬してました。

小玉：清原さんは？

三上：同じくらいで、年齢は全く同じで。京都のほうにいて、大学院で移ってきたので学部の時は知らない。大学院のメンバーをみて、だれかってことはいわないが、全国のいろんな大学から受験者が多くて困ってんだよって言っている教員がいました。大学院での流動があった時期だった。その程度のリスクをしょってでも、論文を書けば就職まではいけるので、みんなまじめでした。なかでも論争をしている人がいますよね、そういう人は、やっつけられるように、議論の段取りをいろいろやりました。

江口：60年安保闘争以降、学生運動もいろんな形で分岐していく時期だったかと思いますが、教育学部の中では、池田さんの聞き取りだと、68年に東大闘争が本格化するまでは違う立場も比較的仲良く議論していたと書かれています。そのあたりはどうですか。

三上：池田さんの考えとしてはそうなると思う。学生運動に関与した人は、何通りかあるわけです。ひ

とつの党派でずっとやったという人たちとか、いくつかやった人など。いろんなグループを消化していくというのが、学生運動のグループというわけです。いろんなところに入ってみるというか、サークルとか研究会が面白くなってくると、どんどん変わってくるわけです。そのときに、演習なんかにてたりして、研究関心が深まる人がいるわけです。

江口：独自の学生の研究会というわけですか？

三上：そういうのだったり、特定の先生がいるわけです。指導の先生は良く教えてくれましたけど、特定の先生たちは、文句ばかりいっているから好かん、といって、演習のときは隅っこにはおいてくれましたけれど。

小玉：持田先生？

三上：持田先生は、愛弟子の3番目か4番目にはいっていたと思います。大学院生である方も多いので申し上げますが、大学院で一番大事なことは、指導教員とまともな議論と、論争らしいことができること。レポートで必ず、卒論なり修論につかえるような意味付けを演習で報告しておくことが、大事なことだと思います。資料論というのは、すみっこにいくと、ごみのたまりばかりでなしに、つまらん頭の回転が全部そこによどんでいる。つまらない勉強をしていると頭がつまらなくなってくる。わたしは、いろんな演習で助けてもらったほうだが、喧嘩しそうな学生の場合は、半年くらいやってみて、そうとう、しっかりと議論できそうだとおもったら、あえて演習にでてもらっておいて、他の先生のところに行って、挑戦、議論したら、と言いたい。レポートしたら難しそうなレポートを引き受けて、やればよいという。

小玉：研究会とか、研究者仲間で、三上さんからみて、いっしょに議論していた人とか、先生は？先ほど持田さんがあがりましたけど。

三上：清原さんとか、目立つほうだし、持田先生のところに行って話している場合、彼がいる場合、大助かりでした。あとで聞いてみたら、こっちも自分なりの言い方で、ちゃんと救いの手を出したりしているんだよね。

重要なのは、大学院のドクターのときの資料論、ドクター2年、3年、4年のときに、どんな資料を読んで、そこから、新しい研究方法の中核になるようなキーワードの吟味ですね。日本の財政史というと、公費教育の、公費っていうのは、大正期でいろ

んなものがあるとわかってくる。明治の終わりから20年くらい見てくると、県段階の資料が見れるようになってくる。日本の場合、大正のはじめから昭和のはじめまでの、都市財政の中の教育費分析の課題がある。ここに絞って、博士論文までいくこともできる。そこからへんまで調べておくと、近代日本の財政の問題、仕組みがわかるようになる。明治のはじめから大正までの資料は、官僚が資料を勝手に作って年度の終わりまでやってるわけです。資料論というと、ひとつは、きちっと議事録を読むことを強調する先生がいるが、もう一つの手は、決算書がある書類を、公費書類としてしっかり読んでいくということです。修士の上で、博士論文でいい資料でやろうとする人がいれば、そういうときはほとんど、難しくてみなが手を付けられなかった史料に挑戦するということですね。普通の人が見逃すようなものを資料論としてチェックしていく作業が必要です。

小玉先生とだったら、ひとつできるなと思っっているのがあって、明治大正期の地方資料論です。これは、地方議会の1年間の議事録がありますでしょう。この中の実際の金の問題で、なにがどうなっているか、不正、ミステイクがどういう風に処理されているか。筆で書いてあるので読めばわかる。わたしは教育行政学科でしたけど、教育行政よりも正義感、価値観をもっている人がこれをやったら、明治から大正における、官僚が背負い込んでいる正義観、功利観の追跡をしてみる必要があると思う。こういうことをいうと叱られそうですが、わたしがもう少し若かったら、若い官僚の不正と資料操作といった主題を博士論文のテーマにしますね。雑誌に要約されているようなのはだめで、分厚い東の資料をやれるようにならなきゃだめです。筆で書いた史料を丁寧に集めて、しっかりとミステイクのところまで全部チェックしていくことが必要です。資料論というのは、どなたにとってもそうだが、数年以上のまとまった資料を読み込んでみてほしいです。わたしは富山県出身で、町立の資料など、細かいものがありながら、使われていない。出身の富山県を、全部それでやりたいと思っている。本当に面白いのは、数十年間、追跡する人がいなかったものを、しっかりと読み取っていくことです。

小玉：教育費の研究は、五十嵐さんの影響があっけられていると思いますけど、黒崎さんが明治期の公教育費で博士論文を書かれていて、その刺激など

も受けられている？そのあたりの関係、黒崎さんの影響関係というのは？

三上：あっさり申し上げます、ぼく、彼よりも2歳下なのですが、最初の問題展開の部分、あれだけシンプルな論文構成をしている博士論文はない。論文ってシンプルで賢いと思いたいと思ったら、黒崎論文を読めばいい。彼の一番優れているところは、大正期に、猛烈に教育費の費用の変化が起きてくる、そこに、地方財政の、官僚エリートみたいなのが全部行くんです。

戦前・戦後にわたって教育財政をやっていた、資料を集め、分析できた人、これは10人程度しかいないです。資料論をちゃんとやらせるという世界を作ると非常に面白い。とりわけ、都道府県の資料、財政資料関係をやっていた人とか、その資料についての指揮権をもっていながら、数十年にわたる量的変化を完全にパッケージ化するという部分が難しかった。なんというか、日本の教育財政をみて感動すべきは、資料を完全にあるところまで知っていて、集めるところまでやっていて、博士にならなかった人、これはほんとうにすごい。旧制の大都市、大阪、京都、その他ふくめて、そういうところの資料論で勝負する人が数人であれば、間違いなく、10数年のパッケージになるので、年度ごとにやればよい。町村財政の非常に重要な部分が30年パッケージで切り取りできるわけです。これをやれば、県レベルでの議論が、金を抜き取りするとか、不正に近いものとか、いろんなものがわかってくる。

小玉：東大闘争に戻ると、当時は学部生だったわけですね。闘争が一通り終息したあとで、大学院に入られた？

江口：大学院で71年度に修士論文をだされていますね。

小玉：東大闘争のころは、学部生で、院に入ったころは終わっていた？

三上：1年落第していたっけ？

江口：68年に4回生をさかれていて、69年はもう1年されたということでしょうか。

小玉：院に入ったときは、持田さんのグループもいたが、東大闘争が終わった後なので、グルーピングとしてはわかっていた中で、教育行政の研究室に入ったという感じですかね？

三上：なんで留年したかな、単位足りなかったんですかね、たぶん。

小玉：教科研はいつから？

三上：大学の5年目くらいから。教科研に入るといって言う人もいるし、わたしは半分くらい悪いって言うつもりです。教科研に入っていたら、なんとかなるっていうことはない。

小玉：わたしが院生のころ、『教育改革の視野』、1988年ですけど、教科研賞を受賞しているんですが、このころには、教科研の政治と教育部会の中心メンバーでご活躍されていたので、そういうイメージで見えていたんですが、先生の意識としてはそうではなかった？

三上：教科研で上のほうは、黒崎、三上昭彦、いっぱいいますよね。注意していただきたいのは、大学院生といいながら、どの講座にも、出席半分くらいの人、そういう方々の中で、優れていてその人と、なにもしてなくてその人がいます。特に、最初に2年に1本くらい書いている人が、2年続けて書いたら、そうとういいもの書けるはずですよ。10年に2年くらいだけ、ほんとうに冴えているときがあるかもしれない。テーマを選びながら、資料を読んでた部分が生きている場合がある。そういうときはりきった論文を先生に見てもらい、議論してやっていったらどうでしょう。

修士論文に類する新しい知見を3年間続けてやるのは、ほとんど脳みそパンクに近くなる。2年勉強したら3年遊んでもいいというのは言いすぎなんですけど、別口のあたらしい研究分野に行ったりして、はずしていろいろやったりしたらいい。

もう一つは、自分が面白がっている研究はあるかということ。それがいつでも成果になっていけばいいんだが、3年かけて猛烈にやったけど、論文としては、1本も成功しなかった、それは4年になつたらまともになるかもしれない。突然はじけるのがあるが、資料論こだわっていて、資料論が生きている瞬間なんですね。一番重要なのは、5年くらいかけてやった資料が生きたときの快感ね。これはすごいです。ぜひみなさん、1年留年してもいいから、そういう玉を生かしてください。論文150枚くらいと、資料目録のしっかりしたものつけて、それを250枚くらいで書けば、博士論文そのものですよ。論文は、アイディアもそうだし、凝集した力が必要なんです。わたしは自分のやっていること全部、やればできるとやっているわけじゃないし、ヒット打率は3割くらいなんです。

小玉：史哲との関係というのは？大学院のころ。

三上：誰がなんと言おうと、学術キーワード、教育行政のキーワードでどこまでなにかできるかということ、教育学の中でしゃべれる範囲がものすごく狭いんです。教育行政やっていると。それでもやればできるが、いまの現状でいうと、史哲と絡ませた方がまだいい。リスクのある研究を、2年に1本でも書ければ、非常に面白い。ああいう研究もできるという評価をしてくれる人もいるし、別のアイディアにつながる場合もある。

小玉：史哲の授業は出ていた？

三上：おもしろいときは出ていた。

小玉：先生でいうと？

三上：堀尾先生はなるべく出るようにしていた。それから、関西のほうに住んでいましたので、そっこのほうは多様なんですよ。日本教育史の場合、関西にいろんな人がいて、そういう意味で助かった。近世における、様々な財政のカテゴリーの確定と分岐点とかね。それと、地方財政、都道府県じゃなしに、藩のあたりの財政分析、これは、関西で冷や飯食ってなかったらやらなかったと思うので、感謝すべきでしょうね。いま言った最後のこと、自分のやっていることが冷や飯食いだと思うかもしれないが、とにかく、次のテーマはこれだと言う風にして、絶対にきちっと論戦になるような文章を作ってみる。資料として十分でなくても、宣言文だけでも作ってみる、ということが必要だと思います。そのためには、やりたいこと、一覧表をだして、先生に見せておくのがいい。

江口：先ほど、研究会が始まる前に伺いましたが、東大の紀要、70年度の五十嵐ゼミで議論したもので、ここに田中孝彦先生など史哲からは参加されていらっしゃいますが、その当時のことについて「てんでばらばら、立場がばらばらだった」と言われていました。闘争が終わって、1年後すぐに検討をはじめられている。こういうことをはじめられたときの背景を伺いたいのですが、五十嵐先生が始められたのでしょうか？

三上：先生は自分が仕切っているといっていたが、資料論という面で、廊下を歩けばうるさい研究者にぶちあたるといって世界だった。わたしなんかは、活字になっているものも少ないし、そういう点でいうと、田中征夫先生などは十分もっていたわけです。院生の研究活動では、相当力の差がでます。

江口：拝見すると、内側から書かれているのは、三上先生と久富先生ですが、それはどういうことなのでしょう。

三上：わたしと彼しか、そういうものを書ける人がいなかった。あの時点で、出てくるものも、にわか作りかと思ったら、2人ともまともなのでびっくりしたと、近いところの先生だけでなく、他の先生方も、忙しい中よくやっていると言ってくれて、ほっとしました。

小玉：川上さんとはどういう関係ですか。

三上：川上さんが某組織のリーダーであったときに、そのあたりの仕事を一部手伝うなどしていた。そういうこともあって、その後も、一種独特の、本づくりのタイミングというのがあるんですよ、彼なりに。単行本でいけると思ったら、どうだ、というわけです。いい場合と悪い場合もあって、3回に1回くらいは載せてもらってた。だけど、3回に2回くらいは、ちょっと、といて逃げていた。一番大事なのは、3年以上の時間があれば、さまになるものにしろ。本にできる。本を出した方が得です。もう一つ大事なのは、そういう議論をしていくと、ある大きいパッケージをめざしているという意欲はわかるわけです。いろいろやらなきゃいけないことは多いが、でも一番重要なことは、自分の存在感をわかるところで見せていくということです、そのためには、学会誌に論文が載ること、学会で文句いうこと。ちょっと年長の研究者を批判すること、そういう覚悟が。

小玉：上の人は、三上先生でいうと。

三上：三上昭彦さんなどでしょう。

小玉：この本では、佐貫先生をかなり批判されていますが。

三上：教育改革という視野を語る時に、イデオロギー的な闘争、そして結論をもっていくというところに論争史があるのに、そこをきちんとテーマ化せずにやっているいろんな事例があったので、批判的な書き方になった。

高木：当時の教育行政学コースについて教えていただきたいのですが、黒崎さんがチューターにつくというのがあったというが、いまだとそういう制度はなくて、論文の検討会はやっているのですが、先生方に見てもらう前に、当時は全体で集まってやるような検討会などあったのでしょうか。

三上：そこまではりきれぬグループというのはほと

んどなかった。

高木：いま検討会をやっているが、下火になっていて、大分前からあるみたいなんです、いつからやっているのかというのがわからなくて。

三上：論文の論評をしていく上で大事なのは、論文ないし、数本の論文、かたまりを、きっちり批評として、批判・批評を作ってあげる、というのが非常に大事です。もうひとつは、そういうのをつくってくれる人がいたら、若い方が応答する、というのが必要だということですね。

3年に1度くらい、論文交換と論争を、ちゃんとやっているかという、メモ一覧を作っておくといい。そういう論争にきちんと応じてしてくれる人か、そうではないか、2通りしかいない。その中で、自分の論文を流行らせていかないとしょうがない。半年から1年で頭のできがうんと変わってくるわけです。これからの自己発展というのは、論文を見たらちゃんと論評ができて、弱点をもっている、論評においては弱い人がいるが、みなさんの年齢でやると、相当けんかになっちゃうので、大先生の論文をみて、やるといい。でも、論争しながらでないと進まない、若人同士でも、たまにやってみてください。そういう風にして、人の特徴と、弱いところ、見て行ったほうが良いと思います。

高木：先生と、日教組とかの関係伺いたいです。73年でしたか、スト権ストで闘っていらっやいますよね。そのあたりの状況というか、そこでの先生の関わり、あるいは教育行政学コースの関わりというのを、教えていただきたいと思ひます。

三上：5年に一区切りくらいで段階が違う、わたしの場合、喧嘩の仕方違うようにしている。いまは真正面に向かって、という形にはしていない。何度かはストレートに載っけなきゃ、という時期もあった。比較的、年に3本くらい論文批評をする人、その場合、そのかたがどのような人であろうと、その批評者としての属性というのを、ひとりの批評家として批評すべきだと思うのです。勝手な批評をさせておくと、勝手な批評を聞かされる、書かれる場合、批評をダメな批評とはっきりと言うべきです。

高木：73年の雰囲気はそういうものだったということですか？

三上：あのころはなにも考えずに、そう思っていました。いまは考えて、何人か、論評したいと思う人を挙げておいて、あまり手の内いうとまずいだけ

ど、5人くらいをとりあげて、本棚に並べておいて。取り上げるまでもない人は、1年もたてば落ちていく。しくじっているという人ですね。でもやっぱり議論すべきだという人には、こういう言い方はしかられますが、かなり重要な人、文句言ってやっつけなきゃいけない人はいます。

小玉：三上さんは、組合とかとのつながりは、そんなにないですよね？教科研、高生研はあったが。日教組でいうと、国民教育研究所とかでは仕事はあまりしていない？

三上：組合については、言われれば書いている。組合の場合、本の縛りというのが相当きついで、わたしの近年の主張といっても、いれないですよ。そういうことを含めて、自分から接近することはしない。

高木：当時の教育行政学コースの中で、日教組に近いようなグループがあって、先生はそちらとは異なるということですか？頼まれれば仕事はするけど、積極的に関与するわけではなかったということでしょうか？

三上：難しく、そうですとも、そうでないともいいようがない。いろんな議論というのは、お互いの捌きなので、特に、比較的、論争論評が好きな人で、まじめな人いますよね、しっかりとした論評が積み重ねられているかを見ながら、引き続き、その人への支持なり批判を続けたほうがよい。約20本くらい論評書いたら、そのうちいくつかはしっかりと批判を書いてやるべきだと思っている。その場合、その著者とは距離を考えなければいけない、ということはあるでしょうね。現状について申し上げますと、日本の教育雑誌の批評および論評の動向は、そんなにひどくはないです。

江口：五十嵐先生は、ソヴィエト教育研究会（ソ教研）などやっていましたが、先生も参加されていたのでしょうか？

三上：参加していたが、ソ教研については、先生の一念があって、ソヴィエト教育学に対するきちっとした意見を述べる場所をもっていたい、というのがありましたので、特に総括批評とか、日本の教育についてこの方向でとかという、比較的大きいテーマで、エッセーなどは書いておられた。先生がそのようにやっておられることについては、大変立派なことだと思うが、わたくし自身はそういうのを年に5本くらい、大所高所から言おうなどという気持ちは

ほとんどないです。

江口：五十嵐先生は、ソヴィエト教育学について、自己批判されたと安川先生が書いています。ソヴィエトとの関係は大学闘争の論争点でもありましたが、そのあたりはソ教研の中で議論というのはあったのでしょうか。

三上：いろんなところであったみたいですね、わたくしはソ教研に友人はいたが、直接そういうことを聞く立場ではないです。

三上：いま、大きい意味での、40代、50代の、淘汰がはじまっているかもしれない、終わっちゃってるという言い方もできるけど。それはありうと思います。どう考えたらいいのだろう、民間教育研究運動が終わっちゃっていたというシナリオがないわけではないが、もうすこし細かく見て行く必要があるのかもしれないけれども。

小玉：佐藤学先生は後輩なんですか？重なっている？

三上：年齢的にはそんなに違わないが、院生のころはあまり関係がなかった。

稲井：持田先生が、67年くらいに、教育計画会議をやっていたが、そちらには？

三上：ときどき、誘われて出たり、という時期はあった。ただ、あのグループは、比較的いろいろ出入りあるので、教科研なんかとは違った、一定の、学校なり地域的なものとの関係など、複雑になっているのではないかな。いまどう考えたらいいんでしょうかね。

江口：教育計画会議というのを、70年代に公教育研究会を作っていくグループかと思いますが、そのころは、どう見られていましたか？

稲井：外側から、持田さんが亡くなったり、五十嵐先生が抜けたり・・・。

三上：そのときは、わたし自身が就職あったということもあるし、比較的、なんらかの組織体に属して、というイメージはそんなに多くなかったようには思う。教科研など出入りはしていたが、むしろ、考えてほしいのは、いま、どういう高校教師、大学教師の社会層が集まれば、どういう研究会なり研究組織の考え方ができるか、こういうところでやってもいいという気はするのだけれども。

小玉：最近は、高生研との接触は？

三上：強めてはいない。

小玉：教科研の中では、高生研の先生方と、まあわ

たしとか藤本さんとか、近い感じでやっていると思われるかと思うが、そのあたりが教科研に参加されている、他の教育行政の先生方と違うところですね、実践とかなり近い、組合というよりは高生研というか。

小玉：浦野さんのなもの、黒崎さん、三上さん、というのはぜんぜん違う。

三上：教育科学研究会というものが、比較的長く、日本の公立学校、私立学校含めて、比較的存続していたという時期から、もう一度再編があるんじゃないかという時期の、問題関心が出てくるという時期にきているかと思うんだけど、その局面をどう説明し、どうまとめるかは難しいですね。高等学校の組織体は比較的弱くなっているのではないか。

小玉：弱いというか、多様化はしている。高校卒業したあとの、進路について、かなり多様化している、1975年の専修学校の、先生と学会発表した、その流れが新しい形でもう1回はしまっているというか。当時はまだ限定的なものだったが、学校教育法改正して、ある意味、1条校に風穴をあけて、そこが一つのターニングポイントだという説を出していた。いまはむしろその流れが強まっている。73年にスト権ストで、日教組と文部省がイデオロギー的に対立していたと描かれがちだが、75年を軸にして、イデオロギーとは別のところで、制度の変更があったという話をしている、当時の教育行政の中では異色というか、まともに相手にされないところかもしれないけど、イデオロギー的ではない制度研究ですよ。

三上：ここに売れ筋のよくないような、本があるが(笑)。まあいずれも、だいぶ古くなっている部分もあるが、結局、1970年代以降に、高等学校を含めた学校制度をどう見るのか、というのを、広い視野で見ようという本はそんなに多くはないですね。一応こんなのでまじめにみましょうというのは、いくらあったわけですね。いままじめに考えなきゃいけないのは、その全体を、後期中等教育といってもいいですし、高校後の教育、あるいは、なんらかの形での、中等後の教育についての制度イメージを考えるとという時期にはきているわけですね。

では、どうイメージをもらえばいいのか。わたしは非常に単純に、実質、高等学校に進学するという人間の高まり、高い水準での維持、この部分をもっと冷静に、特に、さまざまな教育問題を語っているは

ずの人たちの中で、もう一回、新しい学校制度の、ここはもうちょっと強く保障すべきだというところを、話題にしていく必要があると思っています。就学が可能であるということと、それと、地域的な保障というのが目にみえてはっきりしているという部分ですね、これはなかなか、まだしっかりと定着しているとは言えないでしょう。

小玉：本日はありがとうございました(拍手)

(終了)

【付記】

本インタビューは、「史哲の歴史研究会」が主催し、2015年9月9日(水)、18:00~20:00(於東京大学教育学部棟・勝田研)にて行われた。「史哲の歴史研究会」は、小玉教員、小国教員、院生有志により2014年11月より開かれていた私的な研究会であり、基礎教育学コースの前身である史哲研究室(教育哲学・教育史研究室)および東京大学教育学部が日本の教育学研究の中で果たした役割を検証することを目指し、文献購読や聴き取りを行っていた(本インタビューの他に、『研究室紀要』第41号掲載の「私と教育学」(里見実先生への聴き取りの記録)がある)。

本インタビューが行われるにいたったのは、2015年6月の研究会で、川上徹・大窪一志『素描・1960年代』(同時代社、2007年)および五十嵐顕他『国民教育論としての大学論』(『東京大学教育学部紀要』(第14巻、1974年)をとりあげたことによる。その際、東大紛争・闘争時の教育学部の独自の位置について、より詳細な検討が必要との見解に達し、「国民教育論としての大学論」の執筆者のひとりである三上和夫先生に聴き取りをお願いする運びとなった。このたび聴き取りに応じてくださった三上和夫先生に、あらためて深く感謝申し上げたい。

「史哲の歴史研究会」は、いったん幕を閉じたが、その活動を思い起こすと、忘却されたかにも見えながらも、しかしわたしたちの立つ足場をたしかにかたちづくっているものごとの一端に触れていたようにも思われる。もちろん、それは史哲研究室や東大教育学部をめぐる膨大な歴史の僅かな断片に過ぎないだろう。研究会が企図した課題は、なお探究されていく必要がある。その課題の探究は、わたしたち自身にかかわることがらであるように思われるからである。

(桑嶋晋平)